



本番に向け、乗松恵美(左中央)と一緒に練習に励む広島大付属高の管弦楽班

戦後の演奏会 中高生が再現

原爆投下の翌年、広島市の旧制高校や専門学校男女が集い、歌声を響かせた「広島学生音楽連盟」。4年ほどの活動で使った施設のうち、唯一今も残る南区の広島大付属中・高講堂で12月1日、現代の中高生が、舞台を再現する。演奏会「ヒロシマ・音の記憶」シリーズの第4弾。被爆建物でもある会場で、先人の思いを継承する。
(松本大典)



現広島大付属中・高の講堂で歌声を披露する広島学生音楽連盟の合唱団。1947年11月16日(「ヒロシマと音楽」委員会提供)

被爆講堂に「勇気」の歌声

来月1日広島「音楽の力伝えたい」

同連盟は、旧制の広島高等学校(現広島大)や広島女子専門学校(現県立広島大)など少なくとも6校の100人余りが参加。焼失を免れた市内の施設で転々と演奏会を開いたとされる。同講堂は民を励まそうとした先輩の心意気を受け継いでほしい」と、広島大付属中・高に出演を持ち掛けられた。

貴重な活動拠点の一つで、演奏中の写真も残る。演奏会は、ヒロシマに関する音楽作品の発掘、データベース化に取り組み「ヒロシマと音楽」委員会(渡部朋子委員長)が主催。「音楽の力で市

らせる。本番に向け練習は大詰め。合唱班班長の2年井上実乃里さん(17)は「時代を超えたつながりを感じる。心を一つにして歌いたい」。管弦楽班班長の2年三好妃奈子さん(17)も「戦後間もない広島で生きる勇気を届けた同世代に負けないように、私たちに負けないように力を伝えたい」と意気込んでいる。

ほかに、大木惇夫作詞、山田耕筰作曲の「ヒロシマ平和都市の歌」なども披露。ソプラノの乗松恵美(39)は安佐北区をソリストに迎え、オペラ「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」などのアリアも響かせる。

芸能

歌と演奏を担うのは、同校の中高生でつくる合唱班と管弦楽班の男女約70人。同連盟のメンバーがよく歌っていたというシューベルトの「菩提樹」やシューマンの「流浪の民」などをよみがえ

演奏に先立って同連盟の足跡をたどるドキュメンタリー映画「音の記憶・つながり」(同委員会企画・製作)も上映する。午後2時開演。入場無料。同委員会 ☎082(502)6304。